天文学とプラネタリウム

第125回

六本木で星のソムリエ養成講座が始まります！

今月のお題

人は太陽系をどう見つめてきたか

太陽系の魅力の本質とはなにか、それを突き詰めてみました。

高梨直紘（東京大学）
平松正顕（国立天文台チリ観測所）

www.tenpla.net

去る8月6日の夜、JR阿佐ヶ谷駅から徒歩5分のペルシャ料理屋ジャーメ・ジャム。七夕祭りで賑わう街を横目に、この料理屋に次々と吸い込まれていく人影がありました。この日、この店で開催されたのはフランス留学から一時帰国中だった、天文学史を専攻している廣瀬匠さんをゲストに迎えたトークイベント。題して「人は太陽系をどう見つめてきたか」。ど真ん中直球勝負です。廣瀬さんに、美術家の小阪淳さん、コピーライターの片桐暁さんもゲストとして加わり、天プラ的にはたいへん豪華なイベントでした。

このイベントは、国立天文台の企画により太陽系図制作委員会が制作した「太陽系図」の完成を祝うイベントでもありました。太陽系図は、2007年に日本学術会議の「太陽系天体の名称等に関する検討小委員会」の監修の下で制作された「新太陽系図 2007」の後継版です。2006年に国際天文学連合で新たに決められた惑星定義の教育普及を目的に作られた新太陽系図 2007ですが、リリースから7年が経過し、一定の役割を果たしたということで、内容を新しく練り直したポスターが企画されたのです。

世界を知りたいという切実さの系譜

これを受け、小阪淳さん・片桐暁さんを中心に制作委員会が組織され、太陽系をどのように料理するのが良いのか、検討が進められました。水金地火木土天海を素直に取り上げても、どうもつまらない。そもそも、小学校や中学校で習う太陽系の話が、いまいちなんじゃあないか…。太陽系のなにが本質的な魅力なのか、制作委員会の中で熱い議論が繰り広げられました。

その結果、私たちが到達したのは、人々が世界を知りたいという切実な思いに突き動かされて累々と積み重ねてきたものの系譜を描き出すことです。そして、その一場面として、現代天文学の明らかにした太陽系の姿を示すというコンセプトです。その文脈の上で言えば、古代の占星術も、現代の天文学と同様に切実な営みのひとつです。太陽系を現代天文学という一面で捉えるのではなく、もっと奥行きをもって捉えることに挑戦したのでした。

宇宙図が現代天文学それ自身を構造化したポスターとするならば、太陽系図が目指したのは人々と世界の関係を、太陽系をよりしろにして統合化することを目指したポスターです。その目的に向かって歩みを始めたものの、どこまで果たされたかは、まだわかりません。ぜひ皆さんの目で、その内容を確かめてもらえればと思います。

太陽系図。宇宙図2014に接続できるようになっているので、ぜひお試しあれ。

太陽系図は、科学技術広報財団から購入できます。

→ http://www.pcost.or.jp/